

## 第8回：日清戦争と朝鮮の近代化

### 0、「日清戦争」の常識…？

日清戦争とは、1894～5年に発生。日本が清とたたかった。日本の圧倒的優位の内に終わる。下関条約が結ばれ、遼東半島と台湾を獲得したが、三国干渉で遼東半島を返還した…？

「戦場は？ 原因は？ 戦争は日本を、世界をどう変えた？」こうしたこと、どれだけ自覚している？  
⇒常識その1＝「この戦争は朝鮮をめぐる発生した」ということ

### I、朝鮮王国の歴史

#### (1)1392 朝鮮王国(李朝)の建国…李成桂(倭寇を撃退)

- ①華夷秩序の一環として、明の属国として建国
- ②朱子学を官学とし、科挙(官吏登用試験)の科目となる。  
→官僚間の争いが学問上の争いという形を取る(＝「党争」)

1392 李成桂、朝鮮建国  
→朱子学の官学化

1446 世宗、訓民正音を公布

1575 両班の党争の活発化

1592 豊臣秀吉の侵略(～98)

1607 「朝鮮通信使」を派遣

1627・36 清の侵略、服属

18世紀後半 実学の誕生

1800 正祖死亡・勢道政治へ

19世紀前半 民乱の頻発

1860ごろ 崔濟愚、東学を創始

1863 高宗即位・大院君の政治

#### (2)日本の侵略と「善隣」関係

- ①1592 豊臣秀吉の侵略(壬辰・丁酉倭乱)(～98)
- ②1607 通信使派遣＝善隣？関係成立
- ③1609 己酉約条＝対馬を仲介とする国交・貿易

#### (3)1627/1636 清(女真族)の侵略、属国化

- ①清と宗属関係に。のち清が中国全土を支配
- ②小中華思想の成立…清に臣従するが「朝鮮が『中華』の正統な後継者」と自己規定
- ③中国や他国から学ぶ姿勢を失い、形式化・独善化。

#### (4)1863 大院君の政治～王権強化と鎖国攘夷政策

- ①王権強化と強硬な鎖国攘夷政策(衛正斥邪論＝朱子学原理主義！)
- ②米・仏勢力を撃退
- ③明治維新を批判＝「欧米の走狗」とみなす→日本における「征韓論」発生
- ④1873 癸酉政変…大院君の失脚、高宗親政(閔氏政権へ)→改革停止、日本との交渉開始

### II、「朝鮮の近代化」と日本・清両国

(1)朝鮮の近代化をめぐる二つの課題⇒「朝鮮(韓国)」はこの二つの「近代」の間で呻吟する

#### A、「反封建」の課題…伝統的な社会・政治支配、小中華からの解放

- ①政治からの儒教の影響排除＝科挙の廃止
- ②近代的裁判制度(縁坐制廃止)
- ③封建的身分制度廃止(賤民の廃止)
- ④中央・地方政治改革… <甲午改革1905のテーマより>

#### B、「民族の自立・独立」の課題

- ①華夷秩序下の「宗主国・清」⇒しだいに欧米型の支配の方向へ
- ②朝鮮進出の野望を秘める隣国日本⇒新たな関係を強要・優位を得ようとする
- ③欧米列強(とくにロシア)⇒主権国家体制内での開国を要求

#### (2)1875 江華島事件と日朝修好条規～朝鮮の「開国」

- ①日本軍艦の挑発に、朝鮮側が発砲、小規模な戦闘状態に
- ②1876 日朝修好条規(江華島条約)締結＝「朝鮮の自主」の承認と、不平等条約
- ③朝鮮(高宗)はこれまでの関係の延長線として理解
- ④朝鮮政府による開化政策→大院君など衛正斥邪派の強い反発
- ⑤日本の経済進出＝朝鮮の経済混乱すすむ

**(3) 1882 壬午軍乱と清の影響力拡大**

- ① 兵士反乱をきっかけに大院君が政府復活、日本公使館襲撃
- ② 日清両国の出兵→清軍が鎮圧・駐屯＝清の影響力の拡大  
「属国」の意味変更…「不干涉」⇒内政・外交への介入
- ③ 朝鮮…清の影響下での微温的な改革⇒急進派・日本の反発
- ④ 開化派(事大党・独立党)の分裂
- ⑤ 日本の軍備拡張＝専守防衛型から外征対応型に

**(4) 1884 甲申事変～急進改革派の敗北**

- ① 独立党・金玉均ら急進改革派によるクーデター
- ② 日本公使館の援助→朝鮮政府の要請の下、清軍が出動・鎮圧

年度	歳出総額		軍事/歳出		対GNP比	
	千円	千円	%	%		
1875 明治8	69,203	9,785	14.14%			
1876 明治9	59,308	10,329	17.42%			
1877 明治10	48,428	9,203	19.00%			
1878 明治11	60,941	9,249	15.18%			
1879 明治12	60,317	11,257	18.66%			
1880 明治13	63,140	12,009	19.02%			
1881 明治14	71,460	11,852	16.59%			
1882 明治15	73,480	12,410	16.89%			
1883 明治16	83,106	19,194	23.10%			
1884 明治17	76,663	17,487	22.81%			
1885 明治18	61,115	15,512	25.38%	1.92%		
1886 明治19	83,223	20,523	24.66%	2.57%		
1887 明治20	79,453	22,452	28.26%	2.74%		
1888 明治21	81,504	22,786	27.96%	2.63%		
1889 明治22	88,756	23,584	26.57%	2.47%		
1890 明治23	73,082	25,692	35.16%	2.43%		
1891 明治24	83,555	23,682	28.34%	2.08%		
1892 明治25	76,734	23,768	30.97%	2.11%		
1893 明治26	84,581	22,832	26.99%	1.91%		
1894 明治27	185,299	128,427	69.31%	9.60%		
1895 明治28	178,631	117,047	65.52%	7.54%		

山田剛『軍事拡張の近代史』(吉田弘文館1997) p10, 11より作成

**Ⅲ、日清戦争前夜**

**(1) 1885 天津条約＝日清両国の和解と、清による支配強化**

- ① 1) 両軍の朝鮮からの撤退 2) 出兵に際しての相互通告  
⇒十年間の平穏な時代? 他方での軍備拡張(「天津条約体制」)
- ② 清(袁世凱)による宗主国としての介入強化  
1) 朝鮮側に「主人」としての礼を強要⇒朝鮮側や各国の反発  
2) 「中朝商民水陸貿易章程」＝特殊権益を規定、清の輸出増加

**(2) 朝鮮をめぐる国際情勢**

- a) 清…宗主国として権利を主張⇒列強による地位の確認と日本・ロシアなどの影響力拡大を嫌う。
- b) 朝鮮…高宗、ロシアと交渉し自国の属国化を要望⇒朝鮮政府、反発し清に高宗の工作を通報  
⇒清(袁世凱)による介入強化＝高宗退位計画・大院君帰国
- c) 日本…清・ロシアの影響力拡大を嫌う⇒「独立」・「改革」を要望。
- d) ロシア…朝鮮進出には慎重。海軍は前向き。⇒英の動きを意識
- e) イギリス…ロシアの基地獲得を恐れる⇒1885巨文島事件発生

年	輸出(円)	年	輸出(円)
1885	27,201	1896	2,852,050
1886	10,523	1897	6,009,050
1887	128,948	1898	2,704,887
1888	21,472	1899	1,689,909
1889	54,394	1900	4,694,167
1890	2,540,652	1901	6,009,541
1891	2,225,043	1902	3,961,312
1892	1,348,796	1903	4,781,218
1893	470,208	1904	1,578,629
1894	810,475	1905	1,268,502
1895	888,022		

**(3) 巨文島事件…イギリスが朝鮮海峡の巨文島を占領(～86)**

⇒清がロシアとの合意をもとにイギリスと交渉、退去実現

**(4) 朝鮮国内の矛盾の高まりと東学の浸透**

- ① 日本による経済進出…綿布の販売・穀物買い占め＝経済困難に  
⇒朝鮮側、防穀令で対抗、日本側と対立
- ② 朝鮮政府の財政難⇒売位売官で補填＝地方官の不正と悪政  
⇒賑恤機能の破綻＝政府不信と国王への期待のひろがり
- ③ 東学＝民衆の「反封建」意識・世直しへの期待の高まり

1860年、没落両班の崔濟愚が、民間信仰と儒・仏・仙をもとに、「西学＝天主教」に対抗すべく「輔国安民」の宗教として創始した宗教。「人すなわち天」とする平等思想にたち、修行によって「済病長生」が可能になり、さらには身分的差異のない地上天国が実現すると説き、相互扶助のコミュニン化などで勢力を伸ばした。

**(5) 1894 東学農民戦争(全羅準ら)の発生…全羅道などで拡大→5月末全州を占領**

1) むやみやたらに税をとる強欲な悪い役人を辞めさせる、2) 三政(田の税、軍役の代わりに出す人頭税、貸し付け穀物の利子税)の改善と不当な徴税の撤廃、3) 外国商人の不当な活動の禁止

**Ⅳ、日清戦争の発生**

**(1) 1894年 日清両軍の派兵**

- ① 朝鮮政府、東学農民運動鎮圧のため清に派兵を依頼→清・出兵と日本への通知実施
- ② 情報を未然につかんだ日本も準備→通告と同時に想定外の大軍を派兵(陸奥と川上の策略)
- ③ 全州和約＝農民戦争解決→朝鮮政府、両軍への撤兵要請
- ④ 日本、撤兵を拒否⇒「自主独立実現」「朝鮮の内政改革」などを主張(＝開戦理由を探す)

**(2) 「7月23日戦争」＝日本軍、王宮を襲撃・国王を確保、大院君政権→金弘集開化派親日政権成立**

**(3) 日清戦争の発生＝日本軍、朝鮮政府の要請を主張し清に戦闘を開始**

- ① 7月25日豊島沖海戦・高陞号事件、② 7月29日成歓の戦い ③ 8月1日清に宣戦布告

#### (4)開戦をめぐる日本側の背景～条約改正をめぐる政局のゆきづまり

- ①条約改正に反対する議会の動きの拡大⇒政府（第二次伊藤内閣）、対応不可能に＝解散の乱発
- ②清との緊張⇒開戦により政府攻撃を逃れようとする
  - 1) 陸奥宗光外相・川上操六参謀次長…開戦を想定し大軍を派遣
  - 2) 成果がない場合、政府崩壊の危機に
- ③陸奥外相・大鳥公使…強引に開戦に持ち込む



#### (5)戦況、日本の優勢に

- ① 9月16日平壤の戦いの勝利⇒以後、戦場は「満州」へ、旅順虐殺事件…日本軍による捕虜、婦女子・老人を含む一般住民を大量に虐殺、外国メディアの報道で表面化  
→いったん事実を認めたが、のちごまかしに終始。処罰なし。
- ②海軍の勝利 黄海海戦⇒威海衛包囲作戦＝清国海軍壊滅

#### (5)日清戦争下の朝鮮＝甲午・乙未改革1894～95と第二次東学農民戦争の発生

- ①親日改革派金弘集内閣…1)日本の軍事行動に協力 2)本格的な近代化（甲午改革）に着手
- ②第二次東学農民戦争発生＝「ことごとく殺戮すべし」（川上参謀次長）
  - 1)日本軍の徴用・徴発等に反対⇒朝鮮全土で東学軍の再蜂起（約13万?）
  - 2)日本軍は、朝鮮政府軍・両班地主らからなる「義勇軍」とともに鎮圧、約5万人が殺害される

#### (6)「近代化」をめぐる諸勢力

- a.独立党（金玉均ら）…清の影響力排除。王朝の近代化（⇒「反封建」の実現?）
- b.甲午改革（金弘集ら）…清のち日本の力を背景に、上からの「反封建」の実現を本格化
- c.東学（崔時享・全琫準ら）…民衆による下からの「反封建」志向。国王幻想⇒民族独立も視野に
- d.「衛正斥邪」論（大院君?）…伝統的な朱子学的価値観と攘夷論の遵守＝強い民族意識
- e.高宗夫妻…国王独裁実現下での「近代化」を実施。不徹底。ロシアの援助に期待

※日本の立場…自国の影響力拡大＝清・ロシアの影響力排除

自国につごうのよい「独立国」化と「近代化」⇒しだいに「保護国」化をめざす

## V、日本の変容と下関条約・三国干渉の波紋

### (1)「日本国民にとっての日清戦争」～挙国一致が常態化していく

日清戦争によって、上流の軍事公債応募運動、中下層の義勇軍運動一軍夫志願運動、全体が合流した献金献納運動、のそれぞれが始まる融合して、挙国一致が常態化していった。（原田）

### (2)日清戦争とジャーナリズム～戦争報道の過熱化と、それによって部数を伸ばす新聞

### (3)日本政府の方針転換～朝鮮の「保護国」と領土獲得へ

- ①朝鮮の保護国化を閣議決定⇒井上馨公使の派遣
- ②領土獲得を意識した軍事行動へに

### (4)日本と清国のちがいは～体制に手をつけにくかった清と「国民国家」をめざした日本

- ①清…「中体西用論」＝中国の体制は手をつけず、西洋の軍備や科学技術を利用
- ②日本…1)国民国家の形成 2)新興国家の利点…実力主義・システム化・教育水準

### (5)下関条約～日本外交の「失敗」?

- ①領土割譲と賠償金獲得に強く固執する伊藤ら 「戦争の結果たることを諒知せられたし」

<条約の内容> 1)朝鮮の独立を承認 2)台湾と澎湖諸島、遼東半島を譲渡 3)2億両の賠償金  
4)4港開港・外国人経営の企業容認 5)日中修好条規の破棄、新たな不平等条約締結

- ②李鴻章「ひとつの石つぶてで二羽の鳥を捕ろうとしている」＝日本の要求の不当さを指摘  
⇒清の挫折感…近代日本への強い警戒心・不信感を残し、ロシアに接近させる。

- ③東アジアの国際環境を激変させる内容⇒三国干渉を誘発、新たな対立の火種に

### (6)三国干渉～国際政治による制裁とロシア脅威論の発生

- ①ロシア・ドイツ・フランスは遼東半島返還を要求、軍艦派遣⇒受諾へ
- ②日本国内の反発、ロシア脅威論の高まり「臥薪嘗胆」のスローガン
- ③東アジア情勢の激変⇒中国の債務国家化、中国の半植民地化の本格化

## (7)朝鮮における日本勢力の退潮

- ①三国干渉＝「日本がロシアに屈服した」＝日本の影響力の低下  
親日勢力の弱体化⇒高宗・閔妃、日本からの離脱・ロシア接近を進める
- ②閔妃殺害事件＝公使・三浦梧楼、反日派の中心と見なした王后・閔妃を殺害  
⇒国際的な非難、さらに朝鮮国民の強い反発をうける
- ③露館播遷（1896/2～97/2）＝高宗一家がロシア公使館へ逃げ込む、親露派の政権成立
- ④日清戦争の目的は結果的に失敗に終わり、朝鮮でのロシアとの対立激化

## (8)もう一つの日清戦争＝台湾での征服戦争

- ①台湾…移住してきた漢族による「フロンティア」、土地への愛着⇒日本領有に強く反発
- ②台湾住民の激しい抵抗＝「台湾民主国」樹立、激しい抵抗・「平定」後もゲリラ戦つづく  
⇒14000人の台湾人が殺害、「平定」後も12000人が「死刑」などにされる
- ③戦闘と疫病の蔓延により日本兵の死傷者5320人（北白川宮も病死。戦死説も）

## VI、おわりに～日清戦争とは

### (1)日清戦争の日本側の死者

- ①公式には戦死1415人 戦病死11894人
- ②戦病死者の圧倒的な数（コレラ・脚気・マラリア）
- ③この数は正式な兵士のみ、軍夫の死者は不明（7000人以上？）

！不十分な補給体制を大量の軍夫（←旧士族や侠客など）で補填。動員者は約154,000人との推計

### (2)あらためて「日清戦争」とは

#### <戦争の内容>

- ①時期：1894～95
- ②戦ったのは：日本、清、朝鮮（政府および民衆）、台湾住民
- ③戦場は：朝鮮半島と黄海、「満州」南部、台湾など
- ④戦争の原因
  - 1) 朝鮮統治のあり方をめぐる日・清の対立
  - 2) 条約改正をめぐる国内対立
- ⑤戦争の結果結ばれたのは下関条約

#### <戦争の持つ意味>

- ①東アジア情勢のさらなる混乱  
⇒列強の清への帝国主義政策を惹起とロシアとの対立激化
- ②台湾植民地化＝帝国主義国家・日本の誕生
- ③朝鮮への抑圧、さらに失策を拡大へ⇒閔妃殺害事件・露館播遷
- ④「五十年戦争」の開始→絶え間ない対外戦争の時代に
- ⑤日本のあり方の変化＝国民国家が一応完成する。

#### <五十年戦争>

- 1894～95日清戦争
- 95～台湾征服戦争
- 1900 義和団戦争
- 1904～05日露戦争
- 1914～18第一次大戦
- 1918～25シベリア戦争
- 1927～ 山東出兵
- 1931～ 満州事変
- 1937～ 日中戦争
- 1939 ノモンハン戦争
- 1940～ 仏印進駐
- 1941～  
アジア太平洋戦争  
→1945 敗戦

### (3) 日清戦争で生まれた「国民国家」日本

- ①学校教育の定着⇒共通語の普及、教育勅語＝共通道徳、教材・唱歌
- ②憲法制定と帝国議会開設…初期議会における対立から挙国一致へ（立憲政友会の結成へ）
- ③憲法・教育勅語⇒「万世一系」の神話定着
- ④条約改正実現⇒国民的課題の一応の解決
- ⑤「日清戦争」が生み出した「国民」意識
  - 1) 兵士への「感謝」など勝利におけるの一体感の実感
  - 2) 新たな領土（台湾）の獲得＝「アジアの一等国」としての大国意識
  - 4) アジア諸民族への優越意識＝「脱亜論」、排外主義、中国・朝鮮への差別と偏見の広がり
  - 5) 「対ロシア」というより困難な課題の自覚と、自己犠牲の容認のひろがり

#### <参考文献>

原田敬一「日清・日露戦争」「日清戦争論」「戦争の終わり方」、趙景達「近代朝鮮と日本」、海野福寿「韓国併合」糟谷憲一「朝鮮の近代」大谷正「日清戦争」宮嶋博志他「明清と李朝の時代」